仙人

芥川龍之介

皆さん。
私は今大阪にいます、ですから大阪の話をしましょう。
昔、大阪の町へ奉公に来た男がありました。名は何と云ったかわかりません。ただ飯炊奉公に来た男ですから、権助とだけ伝わっています。
権助は口入れ屋の暖簾をくぐると、煙管を啣えていた番頭に、こう口の世話を頼みました。
「番頭さん。私は仙人になりたいのだから、そう云う所へ住みこませて下さい。」
番頭は呆気にとられたように、しばらくは口も利か

ずにいました。

「番頭さん。聞えませんか？　私は仙人になりたいのだから、そう云う所へ住みこませて下さい。」

「まことに御気の毒様ですが、――」

番頭はやっといつもの通り、煙草をすぱすぱ吸い始めました。

「手前の店ではまだ一度も、仙人なぞの口入れは引き受けた事はありませんから、どうかほかへ御出でなすって下さい。」

すると権助は不服そうに、千草の股引の膝をすすめながら、こんな理窟を云い出しました。

「それはちと話が違うでしょう。御前さんの店の暖簾には、何と書いてあると御思いなさる？　万口入れ所と書いてあるじゃありませんか？　万と云うからは何事でも、口入れをするのがほんとうです。それともお前さんの店では暖簾の上に、嘘を書いて置いたつもりなのですか？」

　なるほどこう云われて見ると、権助が怒るのももっともです。

「いえ、暖簾に嘘がある次第ではありません。何でも仙人になれるような奉公口を探せとおっしゃるのなら、明日また御出で下さい。今日中に心当りを尋ねて置い

て見ますから。」

番頭はとにかく一時逃(のが)れに、権助の頼みを引き受けてやりました。が、どこへ奉公させたら、仙人になる修業が出来るか、もとよりそんな事などはわかるはずがありません。ですから一まず権助を返すと、早速(さっそく)番頭は近所にある医者の所へ出かけて行きました。そうして権助の事を話してから、

「いかがでしょう？　先生。仙人になる修業をするには、どこへ奉公するのが近路(ちかみち)でしょう？」と、心配そうに尋ねました。

これには医者も困ったのでしょう。しばらくはぼん

やり腕組みをしながら、庭の松ばかり眺めていました。が番頭の話を聞くと、直ぐに横から口を出したのは、古狐（ふるぎつね）と云う渾名（あだな）のある、狡猾（こうかつ）な医者の女房です。

「それはうちへおよこしよ。うちにいれば二三年中（うち）には、きっと仙人にして見せるから。」

「左様（さよう）ですか？　それは善い事を伺いました。では何分願います。どうも仙人と御医者様とは、どこか縁が近いような心もちが致して居りましたよ。」

　何も知らない番頭は、しきりに御時宜（おじぎ）を重ねながら、大喜びで帰りました。

　医者は苦い顔をしたまま、その後（あと）を見送っていまし

たが、やがて女房に向いながら、
「お前は何と云う莫迦（ばか）な事を云うのだ？　もしその田舎者（いなかもの）が何年いても、一向（いっこう）仙術を教えてくれぬなぞと、不平でも云い出したら、どうする気だ？」と忌々（いまいま）しそうに小言（こごと）を云いました。
　しかし女房はあやまる所か、鼻の先でふふんと笑いながら、
「まあ、あなたは黙っていらっしゃい。あなたのように莫迦正直では、このせち辛（がら）い世の中に、御飯（ごはん）を食べる事も出来はしません。」と、あべこべに医者をやりこめるのです。

さて明くる日になると約束通り、田舎者の権助は番頭と一しょにやって来ました。今日はさすがに権助（ごんすけ）も、初（はつ）の御目見えだと思ったせいか、紋附（もんつき）の羽織を着ていますが、見た所はただの百姓と少しも違った容子（ようす）はありません。それが返って案外だったのでしょう。医者はまるで天竺（てんじく）から来た麝香獣（じゃこうじゅう）でも見る時のように、じろじろその顔を眺めながら、

「お前は仙人になりたいのだそうだが、一体どう云う所から、そんな望みを起したのだ？」と、不審（ふしん）そうに尋ねました。すると権助が答えるには、

「別にこれと云う訣（わけ）もございませんが、ただあの大阪

の御城を見たら、太閤様（たいこうさま）のように偉い人でも、いつか一度は死んでしまう。して見れば人間と云うものは、いくら栄耀栄華（えようえいが）をしても、果（はか）ないものだと思ったのです。」

「では仙人になれさえすれば、どんな仕事でもするだろうね？」

狡猾（こうかつ）な医者の女房は、隙（す）かさず口を入れました。

「はい。仙人になれさえすれば、どんな仕事でもいたします。」

「それでは今日から私（わたし）の所に、二十年の間奉公おし。そうすればきっと二十年目に、仙人になる術を教えて

やるから。」

「左様でございますか？　それは何より難有うございます。」

「その代り向う二十年の間は、一文も御給金はやらないからね。」

「はい。はい。承知いたしました。」

　それから権助は二十年間、その医者の家に使われていました。水を汲む。薪を割る。飯を炊く。拭き掃除をする。おまけに医者が外へ出る時は、薬箱を背負って伴をする。――その上給金は一文でも、くれと云った事がないのですから、このくらい重宝な奉公人は、

日本中探してもありますまい。が、とうとう二十年たつと、権助はまた来た時のように、紋附の羽織をひっかけながら、主人夫婦の前へ出ました。そうして慇懃に二十年間、世話になった礼を述べました。

「ついては兼ね兼ね御約束の通り、今日は一つ私にも、不老不死になる仙人の術を教えて貰いたいと思いますが。」

　権助にこう云われると、閉口したのは主人の医者です。何しろ一文も給金をやらずに、二十年間も使った後ですから、いまさら仙術は知らぬなぞとは、云えた

義理ではありません。医者はそこで仕方なしに、
「仙人になる術を知っているのは、おれの女房の方だから、女房に教えて貰うが好い。」と、素っ気なく横を向いてしまいました。
　しかし女房は平気なものです。
「では仙術を教えてやるから、その代りどんなむずかしい事でも、私の云う通りにするのだよ。さもないと仙人になれないばかりか、また向う二十年の間、御給金なしに奉公しないと、すぐに罰が当って死んでしまうからね。」
「はい。どんなむずかしい事でも、きっと仕遂げて御

覧に入れます。」

権助（ごんすけ）はほくほく喜びながら、女房の云いつけを待っていました。

「それではあの庭の松に御登り。」

女房はこう云いつけました。もとより仙人になる術なぞは、知っているはずがありませんから、何でも権助に出来そうもない、むずかしい事を云いつけて、もしそれが出来ない時には、また向う二十年の間、ただで使おうと思ったのでしょう。しかし権助はその言葉を聞くとすぐに庭の松へ登りました。

「もっと高く。もっとずっと高く御登り。」

女房は縁先（えんさき）に佇（たたず）みながら、松の上の権助を見上げました。権助の着た紋附の羽織は、もうその大きな庭の松でも、一番高い梢（こずえ）にひらめいています。

「今度は右の手を御放（おはな）し。」

権助は左手にしっかりと、松の太枝をおさえながら、そろそろ右の手を放しました。

「それから左の手も放しておしまい。」

「おい。おい。左の手を放そうものなら、あの田舎者（いなかもの）は落ちてしまうぜ。落ちれば下には石があるし、とても命はありゃしない。」

医者もとうとう縁先へ、心配そうな顔を出しました。

「あなたの出る幕ではありませんよ。まあ、私に任せて御置きなさい。――さあ、左の手を放すのだよ。」

権助はその言葉が終らない内に、思い切って左手も放しました。何しろ木の上に登ったまま、両手とも放してしまったのですから、落ちずにいる訣（わけ）はありません。あっと云う間（ま）に権助の体は、権助の着ていた紋附の羽織は、松の梢（こずえ）から離れました。が、離れたと思うと落ちもせずに、不思議にも昼間の中空（なかぞら）へ、まるで操（あやつ）り人形のように、ちゃんと立止ったではありませんか？

「どうも難有（ありがと）うございます。おかげ様で私も一人前の

仙人になれました。」

権助は叮嚀（ていねい）に御時宜（おじぎ）をすると、静かに青空を踏みながら、だんだん高い雲の中へ昇って行ってしまいました。

医者夫婦はどうしたか、それは誰も知っていません。ただその医者の庭の松は、ずっと後（あと）までも残っていました。何でも淀屋辰五郎（よどやたつごろう）は、この松の雪景色を眺めるために、四抱（よかか）えにも余る大木をわざわざ庭へ引かせたそうです。

（大正十一年三月）

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房
１９８７（昭和62）年２月24日第１刷発行
１９９５（平成７）年４月10日第６刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月〜１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年１月５日公開
２００４年３月９日修正

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。